

ジュゼッペ・クラパロほか〔編〕 若山和樹ほか〔訳〕

トラウマと解離の文脈

——ピエール・ジャネの再発見

A5判上製・金剛出版

2025年7月刊

定価5,500円（税込）

評者＝齋藤 梓（上智大学）



大学生の時に受けていた授業を思い出す。アンリ・エレンベルガー（Henri Ellenberger）（本書ではエランベルジェ）の「無意識の発見」を扱った授業だった。教員の、淡々としながらも臨床への深い敬意が現れる声でPierre Janetの名前を聞き、臨床の知への貢献を知った。当時の私は、Janetが発見し、解き明かし、名付けてきた現象が重要であると素直に認識した。そのため、精神分析を学んだ方々には呆れられることかもしれないが、今回本書を読んで、Janetの理論が長い間あまり評価されていなかったことを初めて知った。

とはいえ、Janetの理論を系統立って学んだことはなかったため、本書を読んで私が最初に抱いた感想は「あれも、これも、どれもすでにジャネが言葉にしていたのだ」ということだった。当然だが、時代も文化背景も異なるため、すべてがそのまま現代の臨床に当てはめられるわけではない。しかしJanetが関わってきた患者たちと、私がお会いしているクライアントたちとの類似に、とても驚く。本書からは、トラウマが人々にもたらす孤独の感覚も断片化も圧倒される感覚も、周トラウマ期解離やフリーズ反応の仕組みも、そしてトラウマを負い解離を呈する人々を前にしたセラピストに必要となる、誠実かつ情熱的でありながらも情熱に振り回されない姿勢も、すでにJanetが語っていたことがわかる。

本書の前半、主に第I部では、JanetとFreudやJungなどとの関係が語られている。さまざまな理論が生まれる時代に、今も名を残す人々が、どのように反目し、影響し合っていたのか、そのときのそれぞれの人生やパーソナリティまでうかがえる記述が大変興味深い。

後半、主に第II部と第III部では、Janetの理論が現代の精神外傷学および心理療法へどのように影響しているかが多角的に考察される。一見すると難解な理論が、まさに今のトラウマ臨床とのつながりで論じられているため、読みやすく、わかりやすい。そして最後

に、もしもJanetであったならば、DSM-5における解離についてどのように語ると考えられるかが描かれる。本書を通読すると、現代に存在する解離に関する理論、例えばトラウマ理論や発達理論のなかに、Janetの理論からの発展が息づいていることがわかる。力動、認知行動、身体感覚、いずれのアプローチにおいても、Janetの理論との関わりが見出され、その広がりには驚愕する。

本書のなかに、「ジャネは『心理的力』という概念を説明するのに『解決できないほど困難』（Janet, 1932a, p.309）と表現するほどに苦労した」（p.223）と書かれている。おそらく「心理的緊張」などの概念も、解明するまでに多くの苦労があったのだろう。

私たちは今、幼少期に重篤なトラウマを経験し、解離を呈している方にお会いした時に、その状態について自分なりの見立てを持つことができる。それは、Janetが苦労しながら解明して言葉にしたことを土台に発展してきた、累積された知の賜物だと、私は思う。

幼い頃から暴力にさらされ、自分をバラバラにせざるを得なかった人々は、これまでも今も、社会に存在している。本書の執筆者はもちろん、本書の翻訳者の方々に、心から感謝を申し上げたい。この本を私たちが読み、Janetの理論から今の理論へのつながりを理解することは、私たちが出会うクライアントにとって大切なことだと、私は思っている。

- 原書：Giuseppe Craparo et al. (Eds) (2019) Rediscovering Pierre Janet. Routledge.